

江戸の名プロデューサー 平賀源内



平賀源内 [1728-1779 もしくは1780]

江戸時代中期の本草・物産学者、戯作者。高松藩に仕えて志度浦の蔵番（足輕に相当する低い身分）を勤め、その頃から平賀姓を称する。

1752年長崎に留学。1756年には江戸に出て本草学者田村藍水を師とし、また林家に入門して儒学を修めた。日本最初の物産会をはじめとして師と共に会を5度開き、これを基に『物類品隲』を著した。

その後、企業家に方向転換して輸出用の陶器製作を計画。さらに秩父、多田、秋田の鉱山の採掘に手を出したが、いずれも失敗に終わった。生活に窮した彼は、火漉布、寒暖計、菅原櫛、金唐革、エレキテルなどの細工物を作って急場をしのいだ。

文学者としては小説、狂文集、浄瑠璃などで著作を残し、その多方面の活躍で有名になった。また早くから西洋文化に注目し、芸術面では司馬江漢、小田野直武などに刺激を与えた。

1779年、誤って人を殺したとされ、小伝馬町の牢内で病死した。殺人の原因は、秘密にしていた設計図を盗まれたと疑ったためとも伝えられるが、明らかではない。

非常な奇才であるため様々な伝説を生み、当時「彼は獄死せず、老中田沼意次に助けられて遠州相良に匿われた」という噂もあった。

出典：【平賀源内】 国史大辞典、世界大百科事典 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

	資料名	著者	出版者	出版年	請求記号
技術者	【電子ブック】 平賀源内 (人物叢書; 25)	城福勇著	吉川弘文館	1986	【データベース】 JapanKnowledge Lib JapanKnowledge >本棚>人物叢書

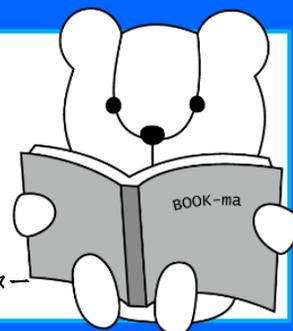
非常の才を抱き、非常の事を行ない、非常の死を遂げた無類の奇人。平賀源内の破格な生涯を巧みに描いた伝記。

出典：【平賀源内】 人物叢書 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

【電子ブックの利用方法】

- 自宅など学外のPCから電子ブックを利用するには、「VPN接続 (Any Connect)」が必要です。
 - ・インストールはこちらから
 - ・VPNについてよくある質問
- 本の同時アクセス上限を超えた場合は、時間をおいて再度アクセスしてください。

市ヶ谷図書館キャラクター
ぶつくま



「本草学者としての源内」

本草学者田村藍水を師とする。

藍水が湯島で開催した日本で最初の薬品会は、源内の発案によるものであった。薬品会とは、薬用の動植物を展示することにより、薬種を国内で自給するための知識の交流をはかる会合。また物産会とも呼ばれ、薬用に限らず、各種の有用な産物が出品された。それは、資源の開発に人々の関心が向けられるようになった時代の風潮を反映し、本草学自体も薬学から物産学へと発展しつつあったが、そのような社会の動向を主導した1人が源内であった。物産会は源内が主催することもあり、1763年には『物類品鑑』を刊行し、附録には朝鮮人参と甘蔗との栽培法を収めた。本草学者としての源内の主著で、実証性を主眼とした点に特色がある。

出典：【平賀源内】 国史大辞典 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

《附録話》「物産会は博物館のルーツ?!」

江戸中期に盛んになった「本草学」や「物産学」は、明治期以降も博物学としてその伝統が引き継がれていった。植物学者伊藤圭介に師事した田中芳男は、明治政府のもと靖国神社で物産会を開いたり、文部省内につくられた博物局の職員として、湯島聖堂内に観覧場を設け、1872年から一般公開している。この「文部省博物館」は、日本の博物館の先駆けである。

出典：『博物館概論（博物館学シリーズ；1）』 鈴木真理編集；占部浩一郎ほか共著 樹村房 1999 市開 069/HA/1
【伊藤圭介】 デジタル大辞泉 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>
【田中芳男】 日本人名大辞典 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

ほんぞうがく

本草学

中国古来の植物を中心とする薬物学。日本には平安時代に伝わり、江戸時代に全盛となり、中国の薬物を日本産のものに当てる研究から博物学・物産学に発展した。

出典：【本草学】 デジタル大辞泉 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

江戸の名プロデューサー 平賀源内

第1回「本草学者・技術者の顔」

	資料名	著者	出版者	出版年	請求記号
本草学者	平賀源内全集 上巻	平賀源内著 平賀源内先生 顕彰會編	中文館書店	1935	081/64/1
	図譜江戸時代の技術 上	菊池俊彦編	恒和出版	1988	502/13/1
	甘蔗培養并ニ製造ノ法 (日本農書全集；第70巻 学者の農書；2)	平賀源内著	農山漁村 文化協会	1996	610/37/70

ぶつるいひんしつ 『物類品隲』

江戸中期の博物学書。平賀源内著。5度に渡って開いた薬品会（物産会）の出品物、合計2000余種の内から主要なもの360種を選んで、産地を示し解説を加えたもの。本文4巻、産物図絵1巻、付録1巻の計6巻からなる。付録の第6巻は朝鮮人参及び甘蔗の栽培法と精糖法を述べたもの。朝鮮人参及び砂糖は海外の輸入に頼っていたので、自給により国益に資するというのが付録の目的であった。全体として中国本草学の影響が強い。しかし、オランダの博物図鑑によって品種を定め解説した個所や、オランダ博物学書の挿絵を写したと思われる個所があり、従来の本草学から西洋博物学に移行する過渡期の所産と見ることが出来る。

出典：【物類品隲】 世界大百科事典 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

こちらも要チェック！

源内が『物類品隲』刊行前後に入手したとされる資料です。貴重書・参考書のためケース内には展示していませんが、閲覧可能な資料です。

（貴重書の閲覧には事前の手続きが必要です。詳しくは閉架カウンターまでお問い合わせください。）

	資料名	著者	出版者	出版年	請求記号
本草学者	Cruydt-boeck ※こちらの資料は展示ケースには展示していません	Remberti Dodonæi	Inde Plantijnsche Druckerije van Balthasar Moretus	1644	091/138 (貴重書)
	鳥獣蟲魚図譜 (荒俣コレクション復刻シリーズ；博物画の至宝) ※こちらの資料は展示ケースには展示していません	J.ヨンストン著	平凡社	1997	480/20:R (参考書)

「技術者としての源内」

源内は伊豆で芒硝（硫酸ナトリウム）を発見し、幕府の勘定奉行からその製造を命ぜられる。1764年に秩父で発見した石綿により火浣布かかんぶを作って幕府に献上。しかし、希望していたと推測される幕府への登用が実現には至らなかったため、独力で物産の開発をはかった。行った事業（金鉱の採掘や、陶器製造及び海外への輸出など）は成功をみず、ただ「山師」の悪名を浴びただけに終わった。源内の意図としては、私的な営利ではなく、「国益」をはかろうとしたものだった。このような着想や、またそれを実行に移すための技術的能力の面では、源内は優れた独創力を発揮した。蘭学導入以前にもかなり高い水準にまで、日本での自生的な科学技術の発達があったことが、このような異才を生み出す背景となっていたと考えられる。

本業としての物産開発の面で行き詰り、菅原櫛や金唐革の製造で営利をはかることもあったが、長崎遊学の際に入手していた摩擦起電器きんからかわの復原に成功し、エレキテルと称して、静電気の放電による火花が医療に効果があると宣伝し、世人の注目を集めた。

出典：【平賀源内】 国史大辞典 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

《附録話》「杉田玄白もその才を絶賛！」

杉田玄白が著した『蘭学事始』に次のような一文がある。

「平賀源内といふ浪人者あり。この男、業は本草家にて生れ得て理にさとく、敏才にしてよく時の人気に叶ひし生れなりき。」

出典：『蘭学事始』 杉田玄白著；緒方富雄校註 岩波書店 1982 市閉 402.1/16:A

	資料名	著者	出版者	出版年	請求記号
技術者	蘭学事始	杉田玄白著 緒方富雄校註	岩波書店	1982	402.1/16:A

『蘭学事始』

江戸後期の回想録2巻。杉田玄白著、大槻玄沢補訂。1815年成立、1869年刊。『解体新書』の刊行を中心に、蘭学導入の苦心談や興隆の機運を記したもの。

出典：【蘭学事始】 デジタル大辞泉 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

江戸の名プロデューサー 平賀源内

第1回「本草学者・技術者の顔」

	資料名	著者	出版者	出版年	請求記号
技術者	図譜江戸時代の技術 下	菊池俊彦編	恒和出版	1988	502/13/2
	文明源流叢書 第1	国書刊行会編	国書刊行会	1913	081/80/1
	【電子ブック】 文明源流叢書 第1	国書刊行会編	国書刊行会	1913	【データベース】 国立国会図書館 デジタルコレクション 図書インターネット公開

オランダばなし 『紅毛談』

オランダ、そして西洋の諸事情を談話筆録風にまとめた書。著者の後藤梨春は江戸の本草家。アルファベット25字（J含まず）を掲げて発禁処分を受け、ゆえに流布本が少ない。「ゑれきてりせいらてい」として本邦で初めて電気に触れ、摩擦起電機の図を説明し、「病人の痛所より火をとる器」とする。平賀源内が本書に学んで実験した。また、「虫目がね」の珍しいものとして顕微鏡の驚異を述べている。『文明源流叢書』に収められている。

出典：【紅毛談】 国史大辞典 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

	資料名	著者	出版者	出版年	請求記号
技術者	火浣布略説 (日本隨筆大成；第2期 巻8)	平賀鳩溪著	日本隨筆大成 刊行會	1928	081/110/2-8
	【電子ブック】 火浣布略説 (日本隨筆大成；第2期 巻8) ※登録タイトルは『三省録』	平賀鳩溪著	吉川弘文館	1995	【データベース】 EBSCOhost

かかんぶ 火浣布

石綿（アスベスト）で織られた布。火で浣^{あら}う布の意。汚れを洗い落とすため火の中に投げこむと、燃え尽きることなく、見事にもとの白色を取り戻すところから、この名が付けられた。

日本では、平賀源内が石綿を使って火浣布を製することに成功。江戸に上ってきたオランダ人に見せ、またそれで作った香^{こうじき}敷を長崎出入りの中国人に与えたことを『火浣布略説』に述べている。

出典：【火浣布】 世界大百科事典 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

「芸術家としての源内」

源内は画才にも長じており、本草の図譜を描く必要もあって、沈南蘋^{しんなんびん}の系統の漢画の写生画を学び、さらに長崎で西洋画の技法を習得した。また、オランダから博物学の洋書を手する傍ら、画家を使って高松で図鑑のプロデュースや、宋紫石^{そうしせき}が描いた図を入れた『物類品隲^{ぶつるいひんしつ}』を刊行した。

浮世絵師の鈴木春信とは「大小絵暦の会」を通して交流があり、源内と親交が深かった時期に春信は多色摺木版画の「錦絵」を初めて発表した。さらに、鉾山開発の目的で秋田へ行った時には、小田野直武に洋画の陰影法を教えて、日本の洋風画の先駆けである秋田蘭画というジャンルの指導者となる。

出典：【平賀源内】 国史大辞典 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

【錦絵】 日本大百科全書（ニッポニカ） JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

参考：『平賀源内（別冊太陽；日本のこころ；65）』 田中優子監修 平凡社 1989 市開 289.1/HI:L

《附録話》「錦絵の考案者は平賀源内?!」

鈴木春信とさかんに交流していた源内は、錦絵の考案者ではないかという話がある。しかしこの話は明らかではない。ただ色摺の技術開発の過程で、源内が春信や彫師、摺師らに様々なアイデアを提供した可能性は大いにある。

参考：『平賀源内（別冊太陽；日本のこころ；65）』 田中優子監修 平凡社 1989 市開 289.1/HI:L

	資料名	著者	出版者	出版年	請求記号
芸術家	平賀源内の研究（創元学術双書）	城福勇著	創元社	1976	H7b/1306

「西洋婦人図」

源内作が確実とされる唯一の西洋画で、日本最初の西洋画とされている。参考にした原画も、モデルもよくわかっていないが、オランダ人が持参した西洋画を模写したものだと考えられている。

出典：『平賀源内：「非常の人」の生涯』 新戸雅章著 平凡社 2020 市開 /平凡社新書/949:S

	資料名	著者	出版者	出版年	請求記号
芸術家	解体新書 [1]: 序・解体図	ヨハン・アタン・キュルムス著 杉田玄白訳	医学古典刊行会	1967	491/48/1:W
	秋田蘭画の近代: 小田野直武「不忍池図」を日本随筆大成刊行會読む	今橋理子著	東京大学出版会	2009	721/182

小田野直武 [1749-1780]

洋風画家。武士の家に生まれる。幼少から画才があり、1773年秋田に来た平賀源内から西洋画法を学び、それを藩主佐竹曙山らに伝えて、秋田蘭画の一派を開いた。同年藩主の命令で江戸に出て、源内のもとで洋風画の研究を進め、1774年杉田玄白が『解体新書』を出版するとき、挿絵を描いた。

短い生涯の最晩期に、西洋画法による日本風景図を描き、司馬江漢を指導して、江戸系洋風画の事実上の祖となった。

出典：【小田野直武】 日本大百科全書（ニッポニカ） JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

	資料名	著者	出版者	出版年	請求記号
芸術家	師宣 - 春信 (原色浮世絵大百科事典; 第6巻 作品; 1)	山口桂三郎・浅野秀剛執筆	大修館書店	1982	G3/692/6:L

鈴木春信 [?-1770]

浮世絵師。錦絵の創始者。江戸や京都の浮世絵師の影響も受けて、独自の優美可憐な美人画様式を確立。

1765年、江戸の好事家こうずかの間で流行した絵暦えごよみの競作は、木版多色摺の技術を急速に発展・洗練させたが、それを浮世絵の版元が活用するところとなり、錦絵が誕生した。春信はこのおりの絵暦制作に中心的な役割を果たし、錦絵の商品化にも大きく貢献した。門人の一人に鈴木春重（司馬江漢）がいる。

平賀源内、大田南畝らとの交友も注目される。

出典：【鈴木春信】 日本大百科全書（ニッポニカ） JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

「文士としての源内」

源内は、1763年に『根南志具佐』(根無草)と『風流志道軒伝』を刊行して好評を博し、文学史上での本格的な滑稽本の端緒をなすなど文人として活躍し、大田南畝と交友関係を結んだ。この後1766年初演の「神霊矢口渡」をはじめとする浄瑠璃の創作や、狂文『放屁論』、同『後編』などに才筆を振るい、諧謔の中に自己の感懐や世相に対する諷刺をこめて、独自の文学を形成した。

出典：【平賀源内】 国史大辞典 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

「滑稽本とは」

滑稽を目的とした戯作類で、後期江戸小説の一分野。当時は中本(現在の新書判に近い型)と呼ばれたが、明治中期以後、近世文学が学問の対象となってから、内容によってこの名称に統一された。

平賀源内の『根南志具佐』や『風流志道軒伝』は、個人的憤懣を基調とし、教訓よりも風刺的内容に発展して異彩を放った。

出典：【滑稽本】 日本大百科全書(ニッポニカ) JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

《附録話》「様々な名をもつ平賀源内」

名は国倫または国棟で源内は通称。戯作者としては風来山人、天竺浪人、悟道軒、桑津貧楽など、浄瑠璃作家としては福内鬼外を用いている。

出典：【平賀源内】 日本大百科全書(ニッポニカ) JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

	資料名	著者	出版者	出版年	請求記号
芸術家	杉田玄白 ; 平賀源内 ; 司馬江漢 (日本の名著; 22)	芳賀徹責任編集	中央公論社	1971	081/5/22 :ISHIMODA

『放屁論』

本編1774年、後編1777年の刊で、1780年には源内の他の戯作4編と合わせて『風来六部集』として刊行。本編では放屁を見せ物にして人気のあった江戸両国橋の芸人を素材にして、また後編ではエレキテルを発明した浪人貧家銭内の口を通じて、創造性のない停滞した身分制社会の諸側面を鋭く批判する。

出典：【放屁論】 世界大百科事典 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

	資料名	著者	出版者	出版年	請求記号
芸術家	寝惚先生文集；狂歌才蔵集；四方のあか (新日本古典文学大系；84)	大田南畝著 中野三敏・日野 龍夫・揖斐高校注	岩波書店	1993	918/2/84

『寝惚先生文集』

狂詩狂文集。2巻1冊。陳奮翰子角（大田南畝）著、風来山人（平賀源内）序。
1767年刊行。時に19歳の南畝の狂詩26首と狂文10編を収める。狂詩流行の端緒となった。

出典：【寝惚先生文集】 世界大百科事典 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

	資料名	著者	出版者	出版年	請求記号
芸術家	風来山人集（日本古典文学大系；55）	平賀源内著 中村幸彦校注	岩波書店	1961	F2b/96/55

『^{ねなしぐさ}根南志具佐』

1763年刊。源内の最初の小説で、2年前浪人となった気安さから小説も書き出したと思われる。同年に俳優荻野八重桐が隅田川で舟遊び中に溺死したという事件があり、これを基に書いたもの。話の筋よりも源内の風刺や世相描写が各所に現れ、彼の奇才が十分にうかがえる。奔放な文章、山師・僧侶・医者・儒者などへの批判、天の岩戸神話の歌舞伎仕立て、両国橋風景などさすがである。彼の文名を一躍有名にさせた作である。

出典：【根南志具佐】 世界大百科事典 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>

	資料名	著者	出版者	出版年	請求記号
芸術家	丸本時代物集 (名作歌舞伎全集；第4巻)	利倉幸一ほか監修	東京創元新社	1970	F2h/98/4

『^{しんれいやぐちのわたし}神霊矢口渡』

人形浄瑠璃。時代物。新田義興が武州矢口渡で横死し、その霊が雷電となったという新田明神の縁起を『太平記』をもとに脚色、鬼外（源内）の代表作であり江戸浄瑠璃の名作である。歌舞伎では、1794年桐座が初演。人形浄瑠璃は本来大坂中心のものだが、この作は場所も事件も江戸中心に描かれている点が珍しい。

出典：【神霊矢口渡】 世界大百科事典 JapanKnowledge <https://japanknowledge.com>